

<研究ノート>

随自顕宗・随他扶宗について

——大玄『浄土頌義探玄鈔』を中心に——

東海林 良 昌

はじめに

本稿で取り上げる、「随自顕宗・随他扶宗」の語は、聖岡（1341～1420）の教学を特徴づける概念として広く用いられている。浄土宗の第七祖である聖岡は、教団の組織面と教理面において、一宗としての独立を基礎づけたのであり、浄土宗史上に偉大な足跡を残している。その功績は多岐にわたるが、先ず挙げねばならないのは、五重伝法に基づく宗戒両脈の制定を行い、教団組織の独立を図ったことである。すなわち、初重・法然『往生記』一卷（機）、二重・聖光『末代念仏授手印』一卷（法）、三重・良忠『領解末代念仏授手印鈔』一卷（解）、四重・良忠『決答授手印疑問鈔』二卷（証）、五重・曇鸞所伝の凝思十念の法の口授心伝（信）という五重相伝の次第を示し、また聖岡自らも『往生記投機鈔』一卷、『授手印伝心鈔』一卷、『領解授手印徹心鈔』一卷、『決答疑問銘心鈔』二卷を著し、諸師の著作と合わせて三卷七書とした（『五重指南目録』一卷）。また合わせて、聖岡は円仁に連なる浄土宗の円頓戒の正統性を主張した（『顕浄土伝戒論』）。これらにより、浄土宗は、血脈に基づいた宗脈の相承と、円頓戒に基づいた独自の授戒制との確立を見、それまでは、他宗によっていた僧侶の養成を自宗により行えるようになったのであり、組織面で他宗からの独立が基礎づけられた。

そして、もう一つが、教理面での独立である。聖岡は教学に関する書籍を多くあらわしているが、特に後世に与えた影響の大きさからいえば、『釈浄土二蔵義』三十卷・『浄土二蔵二教略頌』一卷を挙げることができよう。特にこの二書は、『頌義』と呼ばれ、江戸期檀林教学の必須の書として重用されることとなった。その他にも、『二蔵二教見聞』、『浄土略名目図』、『浄土名目図見聞』、『伝通記糅鈔』四十八卷、『決疑鈔直牒』十卷、『教相十八通』二卷など多くの著作がある。先に挙げた五重伝法に

においては二祖三代の伝統的な教理論を踏襲した聖岡であったが、その他の著作には、他宗の教理を強く意識し、それを取り入れながら、浄土宗の優越性を主張するという独特の論を展開させ、教理面での他宗からの独立を基礎づけた。

この聖岡独特の教理論を後代の人々は、「随他扶宗」（他宗の経論や論理を用いて自宗の立場を扶助すること）と呼んだ。もう一つの「随自顕宗」（自宗の経論や論理を用いてその立場を明らかにすること）は、「随他扶宗」の対概念ということになる。

これまで、聖岡の事跡の中で、教団組織面についての業績は、現今の宗戒両派の相伝の根幹に関わるものであり、また、伝統的な教理論に基づいていることから、多くの関心を呼んでいる。その一方、教理面についての業績は、二祖三代の教学とは異なる聖岡独自の論理に基づいていることから、細心の注意をもって取り扱われてきた経緯がある。¹⁾

本稿執筆の動機は、このような聖岡教学の複雑な取り扱いに関心を持ったことにある。そのような複雑さはどこから来たのか。そもそも聖岡自身は、自身の打ち立てた教学と伝統的な教学との矛盾を感じていなかったはずである。そして、聖岡の著作が、江戸期浄土宗檀林の主要テキストとして用いられたように、後代の者たちは、聖岡教学における伝統教学との相違を感じていたというよりは、聖岡教学を二祖三代の教学と同じように伝統教学の一つとして受け入れていたのではないか。その後、聖岡教学と伝統教学との相違が指摘されるようになり、取り扱い方に変化が表れてきたのであろうと、私は考えている。

その転換が、いつ起こったのか。誰の思想によるのか。結論を先取りすると、それは江戸時代中期に活躍した大玄（1680～1756）の思想に看取できる。そこで、本稿では、当時を代表する学僧である大玄を取り上げ、聖岡教学に対する分析や「随自顕宗・随他扶宗」の語義について整理を行っていききたい。

1) 「虎関禅師師鍊が、その著元亨積書に、俱舎成実と共に本宗を寓宗となし国の附庸に譬へたるが如き。如何ながら当時本宗實際の状態なりしなり。聖岡此状を見て憤慨に堪へず。(中略)学成り業遂げて宗法興隆の大任に膺るや。講演に著述に、固より随自顕宗を遺れざるも、表面は随他扶宗を主として猛進せり」(大島泰信『浄土宗史』1913年、『浄全』二〇)。この他にも、岩崎敲玄『浄土宗史要』(1910年)、望月信亨『浄土教之研究』(金尾文淵堂、1922年)、恵谷隆成『略述浄土宗史』(仏教専門学校、1934年)、同『概説浄土宗史』(仏教専門学校、1936年)、成田俊治・伊藤唯真・平祐史『浄土宗史』(浄土宗教学局、1965年)、服部英淳「了誉聖岡の教学大系に関する述作」(『浄土宗全書』一二、山喜房仏書林、1972年)、峰島旭雄「了誉聖岡における随自顕宗の論理について—『教相十八通』を中心として」(『日本文化と浄土教論巧』、1974年)、服部淳一「聖岡教判成立考—随他扶宗の構成」(『インド文化と仏教思想の基調と展開』、山喜房仏書林、2003年)等がある。

一. 大玄『浄土頌義探玄鈔』における「随自顕宗・随他扶宗」

大玄（1680～1756）は、江戸時代中期浄土宗を代表する学僧の一人。速蓮社成誉信阿・単直水月・聖引・烏有子。特に円頓戒の復興に努めた。宝暦三年（1755）には、檀林会議に計り、『十二門戒儀』による円頓戒の伝授、また日課増進のための聖書や布薩戒に関する決議を行った。その一方、聖罔に関する著述にも注目すべきものが見られる。

それが寛延元年（1748）の序を持つ『浄土頌義探玄鈔』三巻である。本書は、聖罔『积浄土二蔵義』の注釈書である。逐語的な解説というよりは、聖罔教学に関する疑問点とそれに対する解説が中心となる。また、聖罔教学成立の契機、浄土宗伝承の円頓戒、当時の浄土宗における教学の乱れへの注意喚起などが述べられている。今回は、本書の内容の中核をなす、「随自顕宗・随他扶宗」に関心を払いつつ、読み進めていきたい。

イ. 不朽の名著『頌義』と随自顕宗・随他扶宗

まず私達は、大玄による『頌義』礼讃の文言に、驚かされることになる。

「积浄土頌義三十軸は、浄国之金湯、蓮門之枢鍵なり。我宗之徒旃れを捨てて、他に求めば其れ盖しべくならんや。惟れは頌義以前に曾て頌義無く頌義以後に復た頌義無し。」²⁾

本書で大玄は、『頌義』中引用書籍の真偽判定や、伝統教学との相違について、かなり踏み込んだ議論を行っているが、基本的な立場は、ここにある通り、『頌義』は浄国之金湯・蓮門之枢鍵であり、正に『頌義』の先にも後にも『頌義』は無いという、他には求められない固有の価値を『頌義』に認めている。但し画期的な書であっただけに、異論・反論もあり、それについて掘り下げ答えていくと言うのが、本書の一貫した立場である。決して『頌義』を論駁せんとする、批判書ではない。その大玄の立場を踏まえつつ、本書の内容を見ていくことにしよう。

2) 大玄『浄土頌義探玄鈔』上（『浄土宗全書』一二）。以下引用は、『浄全』を基に筆者が書き下した。

「浄家の学、古今を総括するに自ら二門を分かつ。一には随自顕宗門、二には随他扶宗門なり。随自と言うは自宗に順ずる也。随他と言うは他家に順ずる也。一に随自顕宗門とは、亦は経論正義門と名づけ、亦は仏祖真實門と名づく。此れ即ち曇鸞・道綽・善導・源空・聖光・良忠の積義是也。二に随他扶宗門とは、亦は巧説護法門と名づけ、亦は対弁他宗門と名づけ、亦は建立宗旨門と名づく。所謂初分、後分、性頓、相頓、事理縦横、(中略)此等の義門は、随他扶宗従り起これり。」³⁾

このように本書は冒頭より、随自・随他両語が登場する。それによると、浄土宗の教学を総括して、二門に分け、一つは随自顕宗門(経論正義門・仏祖真實門とも。自宗に順ずると言う意味で、曇鸞・道綽・善導・源空・聖光・良忠の積義のことを言う)、もう一つは、随他扶宗門(巧説護法門・対弁他宗門とも。他宗に順ずると言う意味で、性頓・相頓・事理縦横など、他宗の用語に基づく積義のことを言う)であるとする。

これら随自・随他の法門に関連して大玄は、吉水(法然)の立教と、財論の立教とを対応させ、その教判について論を展開している。

「吉水大師西河に依て一代を判じて聖浄二門と為す。聖道門の中に粗に分て二と為す。細に分けて十一と為す。(中略)次に浄土門とは、本願他力凡入報土順次往生正雑二行助正二業三心五念四修五種正行一行三昧光明撰取勝行易行実体化用非権非実等也。具には光明吉水の所説の如し。上来二門を以諸宗を撰すること選択集往生大要鈔大原問答の如し」⁴⁾

これは、法然の教判について、すなわち、一代仏教を聖道門・浄土門に分ける聖浄二門判のことで、聖道門は浄土宗の教え以外の小大乘の教えであり、浄土門は法然の所説に基づく称名念仏による往生の教えをいうのである。

「聖財論に一代を判ずるに粗に分て二と為す。細に分て五と為す。粗分の二とは声菩二蔵也。細分の五とは、小乗・初分・後分・性頓・相頓也。中に於て小初後の三は次の如く蔵通別と異ならず。性相兩頓は其の意円教に当る」⁵⁾

3) 大玄『浄土頌義探玄鈔』上(『浄土宗全書』一二)

4) 同

5) 同

ここで言う『聖財論』（財論）とは、『麒麟聖財論』四卷（『麒麟聖財立宗論』）のことで、聖岡が『頌義』で展開する二蔵二教の教判の拠り所とした書である。内容は、仏教諸宗を価値観に基づき教判し、浄土教の宗旨を述べたものである。この書は、元魏の菩提流支造と言われたが、大玄は偽作と判じている。この教判は、粗分（声聞蔵・菩薩蔵）と細分（小乗・初分・後分・性頓・相頓）とに分けられるとする。ここでは、細分のうち小乗・初分・後分の三について、天台大師智顛の五時八教判における化法の四教（蔵・通・別・円）の蔵・通・別に当たるとして、天台的要素について触れている。このような理解に基づいて、

「我宗の学者須く吉水の立教と財論の立教と同じからざることを知るべし」⁶⁾

大玄は、此れまで浄土宗の伝統とされてきた教判論に、法然の立場に基づく「吉水の立教」と『麒麟聖財論』に基づく「財論の立教」との二種あることを指摘し、浄土宗を学ぶ者は、この相違を峻別しなければならないとしている。

それは、聖岡の『頌義』に展開される、二蔵二教の教判を教理史上に位置づけていく大玄の基準視点と言える。すなわち、聖岡は、浄土宗の教相を二蔵（声聞蔵・菩薩蔵）の菩薩蔵に配当し、そこに二教（漸教・頓教）を説き、頓教の中に、性頓（聖道門）と相頓（浄土門）とを分かち、曇鸞・道綽・善導・法然に相伝された称名念仏往生の教えが、相頓の究竟一乗・頓教中の頓教であることを述べた。その『頌義』の所依の教判は、法然所立の教に基づくのではなく、『麒麟聖財論』の所立の教えに基づいているということである。

ロ. 吉水の立教と財論の立教の相違

先にも述べたように、大玄は、聖岡『頌義』を解説していく中で、浄土宗の教学において、随自顕宗門・随他扶宗門のあることを挙げ、聖岡『頌義』諸説の教学は、随他扶宗門であり、その教判論は、法然所説の聖浄二門判に基づいているのではなく、菩提流支『麒麟聖財論』に基づいているとする。そして、その『財論』を偽撰と断じた上で、聖岡『頌義』に、高い価値を見出そうとする。このような複雑な構造を背景として論が展開されていく。

6) 大玄『浄土頌義探玄鈔』上（『浄土宗全書』一二）

「問ふ。吉水の立教と、財論の立教と何等が経旨に合するや。答ふ。吉水の
本鸞綽導に依る。此等の諸師皆大経観経等に依りて、教相を分判す。是の故
に往生浄土他力易行時機相応等経に在りて分明なり。財論の所立は、円融無
碍事理縦横経に其説無し。只台教を模倣して又台荆の意に違す。何の経旨と
合不合を論ぜん。」⁷⁾

この問答は、吉水・財論の所立が経旨と合致するののかという設問である。これに対
し大玄は、吉水の所立は、曇鸞・道綽・善導の説、即ち、浄土三部経典等によって、
教判を行っているので、経旨と合致する。その一方、財論の所立は、経典にその説は
無く、天台の教えにもそぐわないとし、後人が誤って、真説としたのであろうとする。

「問ふ。問師麒麟を引きて一代を判ず。是亦誤れりや。答ふ。爾らず。是別
に濳致有り。後進其の濳致を知らず。妄りに偽麟を認めて真麟と為す。是後
進之過にして問師の失に非ず」⁸⁾

ここでは、聖岡が儀撰である『麒麟聖財論』を引いて、二教二蔵の教判を行ってい
るが、これは誤りなのかという問いに対し、この聖岡の引文には、奥深い意味がある
とし、『麒麟聖財論』を真撰と誤ったのは、後人の責任であり、聖岡の失ではないと
する。当時の浄土宗学に、後代の誤解が含まれていることを示唆している。その誤解
とは、浄土教を円教であると捉えることで、

「中古以来我が門之徒円教を立てて以て浄宗を撰せんと欲す。密に台荆両祖
の余涎を砥り、多くの勛勞を設けて、円教を成立し、竜蛇の珠を得たりと謂
ふ。斯れ但勞有りて功無し。(中略) 此れ他に無く、鸞綽導空の章疏に由ら
ざる故也。学者応に知るべし。我が宗は、是れ華嚴に非ず、亦天台に非ず、
何が故ぞ我が宗の法門を強いて円門に属して、彼の僮僕と為さんと欲する
や。」⁹⁾

と、中古以来浄土宗の門徒が、円教によって浄土宗の教えを撰しようとする立場があ

7) 大玄『浄土頌義探玄鈔』上(『浄土宗全書』一二)

8) 同

9) 同

り、彼らは円教の精緻を究めたが、それはあくまで天台の範疇のことを究めたにすぎないのである。それは、鸞綽導空の説によらないことに混同の原因があるのであり、我が宗は華嚴でもなく、天台でもないのにどうして円門に属さなければならないのかと非難している。これは、中古以来の問題でもあるし、当時もそのような輩は多くいたようで、

「近世の浄侶を觀るに、所詮之法の円と不円論ぜず。口に任せて円教と呼んで、而して自ら其の何の謂なることを知らざる也。吁醉える者甚だ多く、醒める者安くにか在るや」¹⁰⁾

と、近世の浄土宗僧侶は、浄土教はそもそも円教なのか、そうでないのかという基本的な立場さえ論じなかったようである。自らの立場を円教であると言って憚らない者が多いと嘆いている。そこで問題になるのが、『麒麟聖財論』を基にした聖岡『頌義』である。天台の教義と多く近似点を持つ、『頌義』の立場が問題とされる。

「問ふ。岡師既に相即無生生即無相を謂て、宗の深奥と為す。亦、鸞綽導空之孫に非ずと為さんや。答ふ。爾らず。岡師は別に玄旨有り。後人の妄解に同じからず。」¹¹⁾

この問いは、相即無生生即無相という一見天台的な立場に見える聖岡教学は、鸞綽導空の立場と異なるのではないかというものである。それに対し大玄は、聖岡の教学は、奥深い旨趣があるのだとする。このように、大玄によれば、聖岡『頌義』に説かれる二藏二義の教学は、随他扶宗門と呼ばれ、他宗の用語により自宗の優越性を主張するのを目的とするが、所依の書物は偽撰とされる『麒麟聖財論』であり、鸞綽導空の立場とは異なる円教的な考え方が見られるとする。この聖岡『頌義』は、中古以来当今まで見られる、浄土宗教学の円教化との関連すら凝せられている。しかし、大玄は、聖岡に失は無い。すべては後人の誤解によるのであり、聖岡には一見しては分からない玄旨があるのだと反論する。

10) 大玄『浄土頌義探玄鈔』上（『浄土宗全書』一二）

11) 同

二. 聖岡の玄旨

イ. 時機の違い

ここでは主に中巻を取り上げるが、この巻には、聖岡の行状に始まり、主著の一つである『二教二蔵頌儀』の撰述意図について、すなわち随他扶宗の真意が述べられる。

「平生の述作、(中略)中に於て頌義三十巻は、思いを極め、精を研ぎ、文富み、義豊かなり。誠に是れ宗海の南針、義途之北斗にして、最も奇絶と為す。」¹²⁾

これは、聖岡の行状について述べられている箇所であるが、やはり、述作の中では、『頌義』三十巻が宗義上最重要視されている。その内容について、

「其他家に随う者は、所謂楸を以て楸を抜く也。意ろ異執の慢幢を摧て、以て宗門之光輝を揚げんと欲す。是を随他扶宗門と名づく。二門の施設、各機縁に投じて並びに相違せず」¹³⁾

と、特に随他扶宗門は、他宗を摧いて、自宗を称揚しようとするとして、機縁による違いだけのことであり、両者の相違はないのだという。では、その機縁の違いとは何なのか。

「世勝れ民厚く人々驕慢偏墮之累有ること無し。故に大師仏祖の正義を敷演して更に余途無し。所謂随自顕宗門此れに由て興る。」¹⁴⁾

まず随自顕宗の法門が起こった理由は、法然の時代は、世の中全体が勝れ、人も慎み深く、人々は出離を心から求め、虚栄を好まなかった。そうであったからこそ、法然は仏祖の正義である、称名念仏往生の義を、随自顕宗の法門によって説くことができたという。時(時代)と機(人々の資質)が良かったとするのである。それに対して、聖岡の時代は、

12) 大玄『浄土頌義探玄鈔』中(『浄土宗全書』一二)

13) 同

14) 同

「義主の出るや、世降り俗薄く浮誇姦曲にして、意ろ悃誠無し。攻伐未だ息まらず干戈屢動く南北の縉徒と雖も、或は旌旗を堅て兵革を荷う者有り。間ま聡明才智なる者有れども、多くは利名を徼めて、道德を好まず。実に出離を求むる者千中に一を得ること難し」¹⁵⁾

と、世の乱れたことを挙げている。しかし、道德の乱れや僧界の墮落は、法然在世の当時から、存したと思われるので、時機の違いだけでは、随他扶宗の法門の興起の説明は、説得力を持たない。そこで時機の違い以外の理由を大玄は、室町期の禅宗の興起に見出だしている。

ロ. 禅宗の興起と随他扶宗

この禅宗への対応と随他扶宗との関係は、近代以降の浄土宗史研究においても言われるところであるが、大玄はどのようにそれを捉えているのか。

「是より先、支那の禅衲躅を継いで来朝し五山十刹金碧照曜衣服之制鐘鼓之声、耳を富ましめ、目を悦ばしむ。人豁達を喜び、海内諍て禅に入る。台宗に醍醐の上味有りと雖も、彼の徒も亦諍て禅に入り、以へ為らく仏法復た禅に過ぐるは無しと。乃ち無一物を以て認めて最上と為し、法華止観を貶て方便と為す。立行修観を廃して、著衣喫飯平常無事を真の道人為す」¹⁶⁾

聖岡の在世当時は、禅宗（ここでは臨在禅を指すと思われる）が日本に隆盛を誇った時代であり、天台宗の僧も禅宗に入り、天台の教説も方便であるとして、禅宗の優位性を主張し、諸宗の徒は禅語によって宗義を談じていた有様であったと、大玄は時代を把握している。そして有名な、東福寺の虎関師錬の『元亨釈書』の一節が取り上げられている。

「東福の虎関（中略）三論法相戒律華嚴天台仏心、此大家は威（み）な宗と称すべし。浄土の一門は、伝来の定系無し。故に七家の列に非ず。是を寓宗と名づく。国の附庸の如しと。其の意の云く。念仏の一法は、諸宗の通行なり。七家各挟んで而も之を修す。豈別に家を立てんや。寓とは寄寓客寓の

15) 大玄『浄土頌義探玄鈔』中（『浄土宗全書』一二）

16) 同

義。謂く別に一家の主人と為ることを得ず。故に寓宗と名づく。附庸は謂く、小国の王大国に服事して臣之礼を執る。浄家も亦爾り。以て七家之門に立て、命を聞て而も進退すこと猶し臣僕の如くなるべし」¹⁷⁾

これは虎関師鍊からの浄土宗は寓宗であるとの非難である。これは、浄土宗で言うところの念仏は、諸宗にも説かれるのであり、別に宗を立てる必要は無く、僧団として他に寄寓している、寓宗であるとするのである。この非難に憤激して、聖岡は随他扶宗の法門を説いたとされるが、大玄はその他にも理由を挙げている。

「況や円宗之人禅を認めて最極と為し。豁達自在を自家の風と為す。故に浄家を誣て曰く、指方立相は是権にして実に非ず。麤浅狭劣にして、一も取る所無し。但是れ如来の方便を誘引して、愚痴の男女をして下種結縁せしむ。豈に別に西方の在る有らんと。」¹⁸⁾

このように円宗（天台）の者達が、禅宗を最極として認め、浄土宗については、指方立相は権であって実でなく、如来の方便説であって、愚痴の者達を結縁させているばかりであると、指方立相が否定されている。これらのことについて、

「是に於て義主憤激痛心す。務て異執を芟（か）る。彼の邪輪を摧て、吾が真門を輝かんと欲す。是に由て事理縦横等之説蓋し設けざらんはあるべからず。此れ乃ち随他扶宗門の興る故也」¹⁹⁾

と、聖岡は憤激心痛したという。禅・円宗からの非難に対して、それらを論破して、浄土宗の諸説を称揚しようとした。その為に事理縦横などの聖道門に説かれる語を用いたのだとし、また、

「蓋し義主一化の始終を觀るに、務めて彼邪黨を屈して、我が真門に入しめんと欲す。茲に因て所説之法門隨機応変句句字字密意無きこと能ず。所謂密意とは即ち随他扶宗巧説護法是れ也」²⁰⁾

17) 大玄『浄土頌義探玄鈔』中（『浄土宗全書』一二）

18) 同

19) 同

20) 同

と、他宗の者たちを教化する意味もあったと大玄は指摘する。

このように、随他扶宗門の成立には、禅宗の興起や他宗からの非難への対応という側面がある。特に虎関師錬『元亨釈書』からの浄土宗は寓宗であるという主張、円宗からの指方立相は方便説であるという非難に対し、聖岡は他宗の語を用いて論駁を試み、浄土宗の優越性を説き、さらに他宗の僧侶を取り込む意図をももって興したのが、随他扶宗の法門であるという。

ハ．時代の中で随他扶宗門の果たした役割

この聖岡の随他扶宗法門の成立については、明らかにされたが、最後まで問題となるのは、聖岡『頌義』が偽撰の書物を典拠としていることである。大玄は、典拠の偽撰は認めつつも、『頌義』の偉大さを顕彰している。

「答ふ。大士の化物唯機を撰するに在り。時戦国に当たりて人勝他を好む。他宗の邪徒我が門を軽賤す。是故に義主一時の善巧且く随他の門を開く。二編に依ると雖も、亦妨げ有ること無し。」²¹⁾

これは、『頌義』の典拠である、『建曆法語』、『麒麟聖財論』が、共に偽撰であることを知りながら、何故聖岡が『頌義』を著したのかという問いに対し、大玄は次のように答えている。聖岡はただ人々を教化するというにその目的があったのである。その当時は、戦国時代であって、人々の気風は、他に勝つことを好んだ。他宗の邪徒が、浄土門を軽蔑したから、それへの対応として、随他の門を開いたというのである。その役目を大きく果たしていたのだから、偽撰の書物を典拠としていようが、その価値を損ねることはないとする。そして、随自・随他の違いについても、

「鸞釈導空は治世に遇うが故に、随自顯宗門を開きて、以て経論の正義を彰して、真宗を宣揚し、義主尊者は乱世に処するが故に、随他扶宗門を設けて、以て教綱衰弊を救いて、真宗を広宣す。随自随他其の旨殊なりと雖も、其の真宗を弘ることは即一也」²²⁾

21) 大玄『浄土頌義探玄鈔』中（『浄土宗全書』一二）。大玄は『麒麟聖財論』の他にも、『建曆法語』・『本願義疏』・『浄土布薩式』の真偽をも論じている。

22) 同

と、曇鸞・導綽・善導・法然の時代は、世が治まっていたから、随自顕宗門により真宗を宣揚することができたが、聖岡の時代は乱世であったために、随他扶宗門により教理面で衰退していた浄土宗を立て直し、宗義を広宣したのであり、その業績は同じなのであるとする。これは、随他扶宗の法門は、時代に即応して変容した法門であるので、随自・随他における形式の相違は本質的な問題とされないというのである。大玄は随自・随他の法門は、本質的な精神には相違が無いのであるから、論理構成の形式的な違いなのだとする。すなわち、

「随自の一門は自らに順じ他に背く。是の故に会し易し。随他の一門は、他に順ずるを主と為して以て自宗を護る。自に順じ他に順ず。是の故に会し難し」²³⁾

と、随自顕宗門は、自宗に順じ他宗に背く故に、理解しやすいが、一方、随他扶宗門は、他宗に順ずる論理の構成を保ちながら、自宗を擁護するのであり、自宗に順じ、また、他宗にも順ずるということであって、理解がしにくいとしている。このような論理形式の違いはあるが、本質的な精神は同様であるという、これら二つの法門にはどのような意味があるのか。その意味を大玄は、二つの法門の応用的側面、すなわち教化の場面でどのように展開されるのかに見出している。

「問ふ。末法の世は、随自の益多きか、随他の益多きか。答ふ。機類一に非ざれば、方葉途多し。出離を願う人の為には、随自之教え大利を得たりと為し、勝他を好む人の為には、随他の教え大利を得と為す。又深智之人の為には、須らく随自門を説くべし。浅解の人の為には随他門を説くべし。又随自の一門は仏祖の正統教論の眞実義也。随他の一門は他宗に対弁する一時の巧方便也。又宗源を究めんと欲せば、須らく随自教を学ぶべし。世流に随はんと欲せば、須らく随他教を学ぶべし。偏に一門を執せば、各過失有らん。二門兼学して英雄と称すべしと」²⁴⁾

ここでは、末法の世には随自・随他どちらの益が多いのかという問いが発せられている。それに対し、大玄は、出離を願う人の為には、随自が大利となるのであるし、勝

23) 大玄『浄土頌義探玄鈔』下(『浄土宗全書』一二)

24) 同

他を好む人の為には、随他が大利となるであろうとする。また、深智の人には、随自門、浅解の人には随他門を勧めている。そして、随自門は仏祖の正統教論の真実義、随他門は他宗対弁の巧方便とされ、宗源を究めるには、随自門、世流に随うとすれば、随他門を学ぶのが良いとする。それに加えて、一門偏学は過失が有るので、必ず二門兼学をすることが述べられている。

これまで見てきたように、大玄が捉えた聖岡教学の玄旨とは次のようなものである。それは、随自顕宗・随他扶宗の法門は時代の要請に基づいていたということである。それは、鸞・緯・導・空の時代は、安定した治世で、人々の資質も優れていた時代であったから、随自顕宗の法門のように、仏祖の正義をそのまま説く方法で教化が成立していたのであると。

しかし、時は下り聖岡の時代になると、世は戦乱の時代となり、人々の資質は劣ってきていた。また、禅宗の興起は、予想を超える形で、世に広まり、諸宗の僧侶たちまでが、禅宗の語を用い教理論を交わし、その門を叩く有様であった。さらには、虎関師錬から浄土宗は寓宗であるとされ、天台宗からは、指方立相は権であり、方便の教えであるとの批判を受けるに至り、憤激痛心した聖岡が、打ち出したのが、随他扶宗の教えであるという。

この随他扶宗の法門は、他宗の語を用いて、その論を論破し浄土宗の優越性を説き、他宗の僧侶を浄土門に引き入れるという対処的な意図があったとする。その論理の典拠が、偽撰とされる書物であったとしても、その影響の大なる事を鑑みれば、それは真偽を超えて、不滅の価値を保持し続けているとする。

また、随自・随他の法門の相違については、その精神は、浄土門を広めることとして共通しており、論理形式上の相違のみなのであるとする。その相違と論理の応用にも大玄は着目しており、それを法門名=意味するところ→目的→修学対象者の様に図式化すると、①随自顕宗門=仏祖正統教論の真実義→宗源を究める→出離を願う人、深智の人、②随他扶宗門=他宗対弁の巧方便→世流に随う→勝他を好む人、浅解の人となる。これら二門について大玄は、一門のみ学ぶことを戒め、二門兼学を勧めている。

小括

これまで、大玄『浄土頌義探玄鈔』中の「随自顕宗・随他扶宗」に関する考察を行った。そこから見えてきたこと、今後の課題について触れておきたい。それは、近

代以降の聖岡教学に対する諸見解は、大玄の見解に依るところが大きいということである。

大玄は、二祖三代の教学と聖岡教学の相違点に合理的な説明を試み、聖岡独特の教理論について、大玄は、「随他扶宗・随自顕宗」の二概念を提示した。その相違について、時機の相違と論理形式上の相違を明らかにし、しかし、その精神は両門共通であり、二門兼学を勧めたことで、両門の権威を損なうことなく、浄土宗学史上にその価値を位置づけたのであった。恐らくそれを成し遂げる原動力となったのは、檀林教学の停滞への問題意識があったからであろう。²⁵⁾

今回本書の考察を行ったが、大玄の聖岡教学に対する見解については、若干の整理を行えたものの、そこから見えてきた新たな問題がある。それは例えば、大玄以前の浄土宗の教学において、二祖三代の伝統教学と聖岡教学との相違は、どのように捉えられていたのか、もしくは相違が表面化しないままに、教学や伝法が保持されていたのはなぜかという、中世から近世にかけての教学上の問題である。

また、そもそも大玄が聖岡教学を捉えたのは江戸中期のことであって、聖岡在世時ではない。聖岡にはこのほかにも、伝法・注釈書・神道に関するもの等、多くの書籍が残されている。これまでの伝統教学史上における聖岡への評価を踏まえ、改めてその在世時における聖岡の知の総体に迫る視座からの研究も求められる。今後の課題としていきたい。

(しょうじ よしあき 嘱託研究員)

25) 大玄に『蓮門学則』という書物がある。これは檀林における初学者向けの修学規定である。本書では、檀林の修学過程、名目・頌義・選択・小玄義・大玄義・文句部・礼讃部・論部・無部の全九段階(修学期間は25年以上)のうち、名目・頌義に当たる修学過程の変革を打ち出している。その理由について大玄は、「最初ニ名目ヲ学ヲ専要トセリ。是一等ノ術也ト云ヘドモ、深ク按ニ。可ナラザルニ似タリ。何トナレバ。其要領ヲ得ル事。初学ノ及ビ難キ処也。何トナレバ頌義ハ、一代伝教ヲ、聖浄二門ニワタル学ナレバ、其要領ヲ得ル事、初学ノ及ビ難キ処也。故ニ還テ学ニ倦疲テ、退屈ヲ生ズル者多シ。」(大玄『蓮門学則』、『大正蔵』八三)と、聖岡教学は聖浄二門に渡り、初学者には難解であるからとする。そこで、名目・頌義に当たる課程において、選択集(五～十日)、三経一論(三十日)、五部九卷(三ヶ月～百日)・名目図見聞(十日)・二蔵頌儀(四～五ヶ月)・決疑鈔等の浄土宗典籍(事後研鑽)・法象を守る・法門を修学させる等の修学課程の変更を提示している。